



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「鞆(ブランコ)」についての考察：唐宋詩における「鞆」のイメージについて(fulltext)
Author(s)	六谷,明美
Citation	研究紀要/東京学芸大学附属高等学校(52): 133-143
Issue Date	2015-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/139120
Publisher	東京学芸大学附属高等学校
Rights	

「鞦韆（ブランコ）」についての考察

—唐宋詩における「鞦韆」のイメージについて—

国語科 六谷明美

〈要旨〉「鞦韆」とは「ブランコ」のことである。この研究は宋代の詩人、蘇軾の「春夜」という詩に詠まれた「鞦韆」を端緒に、「鞦韆」の起源や「鞦韆」の詠まれ方の変遷を考察することによって、「鞦韆」が持つイメージをつかみ、「春夜」という詩をより深く理解し、鑑賞しようという試みである。

〈キーワード〉鞦韆 ブランコ 寒食 清明節 女の子 春 月夜

はじめに

宋代の詩人、蘇軾に「春夜」という詩がある。

春夜 蘇軾

春宵一刻直千金

しゅんしょういっくくあたひせんきん

花有清香月有陰

はなせいこうげつかげあり

歌管樓台声細細

かかんろうたいこえさいさい

鞦韆院落夜沈沈

しゅうせんいんらくよるちんちん

春の夜はほんの短い時間も千金の価値がある
花には清らかな香りがあり 月には光がある
たかどのから聞えていた歌声や笛の音も（今では）細くかすかになった
ぶらんこのある中庭の片すみは（人けもなく）静かに夜が更けていく

この詩は宴が終わった後の静かに更けゆく春の夜を詠んだ詩である。この詩の最後には、夜の庭にひっそりと取り残された「鞦韆」が登場する。「鞦韆」とは「ブランコ」のことである。公園にひっそりと取り残されたブランコ。それはい

かにも現代的なイメージがある。しかし、「ブランコ」と言えば、公園で鉄の鎖で吊り下げられている遊具を思い浮かべる。それが、中国の宋の時代の庭の景として描かれていることに違和感を感じた。「ブランコ」は明治以降、西欧から入ってきたものではないのだろうか。この詩の注には「春、高い木の枝に五色の繩をつり下げて行なう女の子の遊び」とある。どうして、女の子の遊びなのだろうか。また「ブランコ」自体、日本で目にする鉄の鎖でできた西洋的な「ブランコ」とは違うものなのだろうか。この詩を解釈し鑑賞するためには、中国の宋の時代における「鞦韆」の持つ詩語としてのイメージを押さえる必要があると考えた。

また、ある時、李王朝期の絵師を描いた「風の絵師」という韓国ドラマの中で、ブランコを目にした。端午の節句に画題の「ブランコ」を探しに行った主人公ユンボクが、溪谷の中で女たちがブランコ遊びに興じている姿を見つける。木に吊り下げられた大きなブランコ、女の子たちの開放的な様子はインパクトが強く、忘れられないシーンだ。そして、韓国にもこのようなブランコが昔から存在していることに不思議な思いがした。ドラマの中では端午の節句を「外出もできない女が、唯一外に出られる日。年に一度の開放感を味わえる日」だと述べている。

その後、朝鮮一の名医の一生を描いた韓国ドラマ「ホ・ジュン」の中にも「ブランコ」が登場した。主人公ホ・ジュンを陰で支えたイエジンがホ・ジュンに宛てた手紙の中に唐の詩人、李商隱の「無題」を引用した場面があった。その中に十五の時 わけもなく春が悲しくなりました ブランコの綱を握ったまま顔を背けて泣きました

という一節があった。この詩はイエジンのホ・ジュンに対する切ない思いを表すために引用されたものだが、韓国の文化にも中国の文化が色濃く浸透していることがわかる。韓国では鞦韆は端午の節句と関わりがあるようだ。また、李商隱が生きた晩唐の時代に、すでに「鞦韆」が存在していたこともわかる。中国にも韓国にも近代以前に「鞦韆」が登場していたのである。

そこで、本研究では、「鞦韆」にはどのような起源があり、漢詩においてどのようなイメージがあるのかを考察することによって、蘇軾の「春夜」という詩をより深く鑑賞する一助にしていきたいと考えた。

一、鞦韆(ブランコ)の起源

「鞦韆」は、中国に存在した遊具であり、現代中国語でも「ブランコ」を「秋千(qiūqiān)」と呼んでいる。果たして蘇軾の「春夜」に詠まれた「鞦韆」を、日本の「ブランコ」のイメージで解釈していいのだろうか。そこでまず、「鞦韆」の起源について調べることにした。

春秋時代

「鞦韆」の起源についてはいろいろな説がある。『天寶遺事』によると、春秋時代に北方の山戎が作ったもので、身体を軽やかにする軍事項目の一つとして用いたとある。その後、斉の桓公が山戎に遠征し出兵した際、中国(中原)にも伝えられたという説である。その他にも、嘉慶年間に玄天大帝が人民のために早災や瘟疫を駆除した神蹟を記念するために鞦韆をこいだという説もある。

漢

鞦韆は「秋千」とも書く。最初は「千秋」であったが、『天寶遺事』によると、漢の武帝の時に、「千秋」を長寿を祝う詞として「千秋萬壽」の意にしたため、後に諱を避けるためにさかさまにして「秋千」としたとある。漢代になると「鞦韆」が後宮での遊戯となったようである。

一方、漢以後、鞦韆は「寒食節」「清明節」と結び付けられていった。「寒食節」とは、冬至後百五日目を言い、その前後二日もしくは三日間、火の使用を禁じ、あらかじめ用意した冷たい物を食べる風習である。「寒食」の起源は、新しい火の陽火で春の陽気を招くという古代の改火儀礼だという説や、昔、中国で冬至後百五日目の日は風雨が激しいとして、この日には火を断って煮たきしない物を食べたという説、晋の文公の功臣である介子推の焼死を悼んで、一日火の使用を禁じたという説などがある。「寒食」は、旧暦三月末、現在の暦だと四月中旬頃で、晩春にあたる。氣候のいい季節である。この寒食の冷餐によって身体をそこなうことを防止するために、人々は身体を鍛えようと「鞦韆」などの体育活動に参加したようである。これらの活動には他に踏青(野外の遊び)や蹴鞠、打馬球や挿柳などがあつた。「寒食節」が明ければ「清明節」になる。古代にはこの二つの祭日は一体となっており、「寒食節」が明けると、人々は墓参りをして祖先を祭り、

青山に登り、清明節を過ごしたのであつた。

六朝

六朝時代になって初めて、宗懐の『荆楚歲時記』に「正月…(中略)…又為打球、鞦韆之戲。」のような記述が見られる。これは、鞦韆という遊戯が中国で行われていたことを示している。原勝郎氏は『鞦韆考』の中で、「藝文類聚・初學記・太平御覽等に散見する引用文を比較すると、六朝時代に既に支那に行はれたことを示すのみ…三月寒食に行ふ遊戯の中に、鞦韆といふ名目がある。」と述べている。また、「四庫全書提要の説…(中略)…之を梁の元帝頃の人だとするに従ふと、梁代には既に荆楚地方に行はれて居つたことを明かにし得る。鞦韆の輸入は梁よりも早かるべく、齊か宋か或は晋かも知れぬ。北方蠻人との交渉から始まり、齊の桓公や漢武などではなくとも、五胡七國の頃に既に渡つたものと見るのが妥當だと云ふことになる。…支那の鞦韆が晋か六朝の初め頃からのものであるとしても、其時代の文献では其如何なるものなるかを知ることが出来ぬ。之を詳にし得るのは唐以後のもの」と、文献によって裏付けられるものは、唐以後であると述べている。また、南北朝になると、寒食節は単なる禁火寒食からさらに娯楽化の方向へと変化していった。

隋・唐・宋

隋から唐・宋に至っては、鞦韆は宮中だけでなく民間でもかなり流行したことが明らかになってくる。宮中においては、唐の玄宗皇帝が「鞦韆」に「半仙戯」の名を与えた^註とある。鞦韆にのると、人間に羽が生えて仙人となり天に登るような羽化登仙の感じを味わうことができるからである。このことから、唐代には女性が鞦韆にのる儀礼が宮中で行われていたことがわかる。

それと同時に、「鞦韆」は寒食の際の女の子の娯楽活動として民間でも流行していった。唐代になると、氣候のいいこの時期、野外での遊びの風習が非常に盛んになった。氷が解け、春風が吹き、草が芽生える春、人々は郊外に行き、春を楽しむようになった。唐詩の中にも野外での遊びについての記述が多く見られる。鞦韆をこぐことは、女の子の遊びであり、春の景物であつた。

二、唐宋詩における「鞦韆」のイメージ

先に述べたように、唐代になると、漢詩の中に「鞦韆」が、しばしば詠まれるようになった。そこで、時代の流れを追って「鞦韆」が詠まれた漢詩を引用し、「鞦韆」には詩語としてどのようなイメージがあるのかを追ってみたい。ここでは「鞦韆」が詠まれている漢詩や詞をいくつかピックアップし、それぞれ詠まれ方の特徴を分析し、最後に表にまとめた。

盛唐

●杜甫「清明二首」其二

此身漂泊苦西東	此の身漂泊して	西東に苦しみ
右臂偏枯半耳聾	右臂は偏枯し	半耳は聾す
寂寂繫舟双下淚	寂寂たる繫舟	双び下る涙
悠悠伏枕左書空	悠悠たる伏枕	左書空し
十年蹴鞠將雛遠	十年 蹴鞠	將雛遠く
万里鞦韆習俗同	万里 鞦韆	習俗同じ
旅雁上雲歸紫塞	旅雁 雲に上り	紫塞に歸り
家人鑽火用青楓	家人 火を鑽るに	青楓を用ふ
秦城樓閣烟花裏	秦城の樓閣は	烟花の裏
漢主山河錦繡中	漢主の山河は	錦繡の中
春去春來洞庭闊	春去り春來たり	洞庭闊く
白蘋愁殺白頭翁	白蘋愁殺す	白頭の翁を

この詩は、杜甫が蜀に流亡してから十年後、過ぎ去った歲月や異郷でのさすらしいの悲哀を描いた詩である。長安の都も蜀の山河も、杜甫の記憶の中にはきちんと残っている。清明節の代表的な遊びである「蹴鞠」は男の子、「鞦韆」は女の子の遊びである。この詩では、十年もたてば子供達は大きくなって「蹴鞠」で遊ばなくなったが、「鞦韆」は長安でも蜀でも同じもので、何処に行っても変わらなないと詠んでいる。そして最後に杜甫は「浮き草が春になって元気に白い花を咲かせることに、白髪頭は打ちのめされた」と自分の苦悩を生々しく描く。

「鞦韆（ブランコ）」についての考察

●王維「寒食城東即事」

清溪一道穿桃李	清溪一道	桃李を穿ち
演漾綠蒲涵白芷	演漾たる綠蒲	白芷を涵す
溪上人家凡幾家	溪上の人家	凡そ幾家ぞ
落花半落東流水	落花 半ば落つ	東流の水
蹴鞠屢過飛鳥上	蹴鞠 屢過ぐ	飛鳥の上
鞦韆競出垂楊裏	鞦韆競い出づ	垂楊の裏
少年分日作遨遊	少年 日を分ちて	遨遊を作す
不用清明兼上巳	用らず	清明の上巳を兼ねるを

節日の前後は休日、気候もいいので、人々は踏青（野外での遊び）に出かける。王維も官廷を出て東の郊外に行き、自然の美しさや人々の様子をのびのびと詠った。この詩は清明節と上巳節（桃の節句）が重なることから、天宝二年（743）の寒食節の際の詩と推定される。ここでは、女の子たちが鞦韆に乗り、宙高くこいでいる様子を描写している。杜甫も王維も、清明節あるいはその直前の寒食の時期に、若者達が蹴鞠や鞦韆で遊ぶ習慣を描いている。

中唐

●白居易「寒食夜」

四十九年身老日	四十九年	身老ゆる日
一百五夜月明天	一百五夜	月明らかなる天
抱膝思量何事在	膝を抱きて	思量するも何事か
癡男駭女喚鞦韆	癡男駭女	鞦韆を喚ぶ

この詩において白居易は「四十九」歳といっている。元和十五年、つまり、正月に憲宗が急死した年だとわかる。大喪中である。「一百五夜」とは、冬至から数えて百五日目で「寒食節」である。白居易は「膝をかかえて考え込んでいる。」それは都の情勢についてだろうか。一方、大喪中にもかかわらず、子どもたちはそれを気にすることもなく、楽しそうに鞦韆遊びに夢中になっている。この詩は、「清明節」が間もなくやって来る「寒食節」の、月の明るい夜に、邸宅の庭で鞦

鞭遊びをしている子どもたちを描いている。「鞭」は日中だけでなく夜も行なわれていたことがわかる。

晩唐

●李商隱「無題」

八歳偷照鏡 八歳にして偷かに鏡に照つし
 長眉已能画 長眉 已に能く画く
 十歳去踏青 十歳にして去きて青を踏み
 芙蓉作裙衩 芙蓉もて衩と作す
 十二学弹箏 十二にして箏を弾くを学び
 銀甲不曾卸 銀甲 曾て卸さず
 十四藏六親 十四にして六親に藏る
 懸知猶未嫁 懸めて知る 猶ほ未だ嫁がざるを
 十五泣春風 十五にして春風に泣き
 背面鞦韆下 面を背く 鞦韆の下

この詩は、女の子の天真爛漫で無邪気な幼い時から、年を数えつつ、女として修得すべき家事・芸事にいそしむことを歌い、最後に嫁入り前の気持ちまでを詠む。人生が大きな転機を迎える直前の、不安に揺れ動く少女の心を描き出している。鞦韆は、十五才の少女が春風に吹かれながら涙する場所となっている。「清明節」や「寒食節」という語は出てこないが、「春風」とあるので、やはり、この時期にあたると考えられる。鞦韆は少女たちが屈託なく楽しんでいた時期の象徴のように思われる。

●韋莊「浣溪沙」其二

欲上鞦韆四體備 鞦韆に上らんとして四体備し
 擬教人送又心忪 人をして送らしめんと擬するも又心忪く
 畫堂簾幕月明風 畫堂の簾幕に月明らかに風ふく
 此夜有情誰不極 此の夜情有るを誰か極めざらん
 隔牆梨雪又玲瓏 牆を隔てて梨雪又玲瓏たり

玉容憔悴惹微紅 玉容憔悴して微紅惹る

この詩は、月明かりの美しい夜なのに、自分が思う人がやって来てくれない寂しさを詠んだ詩。梨の花が咲き乱れた春。使いの者を行かせることもできない。鞦韆に乗って楽しむ気持ちにもなれず、一人で涙を流す女を描いている。女性の立場で詠んだ詩である。「清明節」や「寒食節」という語は出てこないが、「梨雪（白く咲く梨の花）」とあるので、やはり、この時期にあたると考えられる。「春の明るい月の夜」、「鞦韆」、「女」の組み合わせである。

●韋莊「長安清明」

蚤是傷春夢雨天 蚤くも是れ傷春 夢雨の天
 可堪芳草更芊芊 芳草の更に芊芊たるに堪ふべし
 内官初賜清明火 内官初めて賜ふ清明の火
 上相閑分白打錢 上相閑かに分かつ白打錢
 紫陌亂嘶紅叱撥 紫陌亂れ嘶き 紅叱り撥ぬ
 綠楊高映畫秋千 綠楊高きに映じて 秋千を畫く
 游人記得承平事 游人記し得たり承平の事
 暗喜風光似昔年 暗に喜ぶ風光昔年に似たり

作者は清明節の日に友人と長安の郊外に遊びに行く。朝、少し雨が降ったが、郊外で野外の遊びをしたりするいつもの清明節ののどかな情景を目にした。しかし、尾聯の「この光景は以前の太平の世と同じである」という句から、現在の社会の状況はあまり良くないことが察せられる。「紫陌亂嘶紅叱撥 綠楊高映畫秋千」は、清明節に郊外で楽しく鞦韆遊びをしている光景を描いたものである。

●韋莊「清平樂」

何處遊女 蜀國多雲雨 何處にか遊女 蜀國雲雨多し
 雲解有情 花解語 雲は情を有し 花は語を解す
 翠地綉羅金縷 地を穿たる 綉羅金縷
 妝成不整金鈿 妝ひ成るも金鈿整はず

含羞待月鞦韆
住在綠槐陰裏
門臨春水橋邊
羞いを含み月を鞦韆に待つ
綠槐の陰裏に住む在り
春水の橋邊に門臨す

『清平樂』は、世の中が清らかに治まっていることを詠う詞である。ここには、春の宵に恥じらいながらブランコに乗り、月の出を待っている遊女の姿が描かれている。遊女は「青々と茂ったエンジュの木陰のところに住んでいる」と言っていた。門から望む景色は春の増水した川の流れに橋のあたりに面している。春の景であり、夕暮れから夜にかけての時間に、ブランコと遊女が配されている。

●韓偓「夜深」

側側輕寒翦翦風
小梅飄雪杏花紅
夜深斜搭鞦韆索
樓閣朦朧煙雨中
側側たる輕寒 翦翦の風
小梅雪を飄はせて 杏花紅なり
夜深斜めに搭の 鞦韆の索
樓閣朦朧として 煙雨の中

「夜深」とは、夜が深まった時。「寒食夜」ともする。「翦翦」は、風が薄ら寒いさま。昼間にぎやかに女の子たちが乗って遊んでいた鞦韆が、夜になって霧雨の中にぼつんと残されている情景を描いている。鞦韆の繩は斜めになっている。季節はまだ肌寒い春である。まさに寒食の頃の夜の景である。

●王建「鞦韆詞」

身輕裙薄易生力
雙手向空如鳥翼
下來立足重系衣
復畏斜風高不得
旁人送上那足貴
終賭鳴璫斗自起
回回若與高樹齊
頭上寶釵從墮地
身輕やかに裙薄く 力を生じ易し
雙手空に向かひて 鳥翼の如し
下り來たりて足を立て 重ねて衣を系ぐ
復た斜風を畏るに 高きを得ず
旁人上に送り 那ぞ貴きに足らん
終に鳴璫を賭け 斗に自ら起つ
回回として高樹と齊しからんとするがごとし
頭上の寶釵 従ひて地に墮つ

「鞦韆(ブランコ)」についての考察

眼前爭勝難為休
足踏平地看始愁
眼前勝ちを争ひ 休みを為し難し
足は平地を踏み 始めて愁ひを見る

この詩は、屋外での鞦韆遊びそのものを描いている。「高樹と齊しからんとする」などから、鞦韆をこいで高く舞い上がっている様子が想像できる。

五代

●李煜「蝶恋花」

遙夜亭皋閑信步
乍過清明早覺傷春暮
數點雨聲風約住
朦朧淡月雲來去
桃李依依春暗度
誰在秋千笑里低低語
一片芳心千萬緒
人間沒個安排處
遙かなる夜亭皋のあたり 閑ろに歩むに信す
乍ち清明を過ぎしに早に覺ゆ傷春の暮れ
数々雨声を点じ 風に約し住められ
朦朧たる淡き月 雲は来去す
桃李は依依たれども春は暗かに度ぎゆく
誰か秋千に在りて笑いの里に低低として語る
一片の芳心 千万の緒い
人間に個つとして安排する處沒し

李煜は、五代南唐の最後の国主で、詞の作者としても有名である。これは詞である。作者が春の夜、庭のあずまの辺りを散歩していると、鞦韆に乗った女性たちが、何やら笑いながらひそひそ話をしているのが聞こえてきた。何を話しているのかはつきりわからないが、それは作者をとて惹きつけるものであった。

宋

●蘇軾「春夜」

春宵一刻直千金
花有清香月有陰
歌管樓台聲細細
鞦韆院落夜沈沈
春宵一刻 直千金
花に清香有り 月に陰有り
歌管 樓台 声細細
鞦韆院落 夜沈沈

●蘇軾「寒食夜」

漏声透入碧窗紗
人静鞦韆影半斜
沈麝不烧金鴨冷
淡雲籠月照梨花

漏声透り入る 碧窗紗
人は静かに 鞦韆 影半ば斜めなり
沈麝焼かず 金鴨冷ややかに
淡雲 月を籠めて梨花を照らす

寒食は旧曆三月末。現在の曆だと晩春にあたる。寒食の夜は、火を使うことができず、ひっそりと過ごした。人気のない庭に取り残されている鞦韆の影が斜めに映っている。鞦韆は昼間、少女たちが楽しそうに乗って遊んだその残像を彷彿させる。梨の白い花が鮮やかである。

●歐陽脩「蝶恋花」

雨横風狂三月暮
門掩黄昏
無計留春住
淚眼問花花不語
亂紅飛過秋千去

雨 横ざまにして 風 狂ふ 三月の暮
門は 黄昏を掩れど
計る無し 春を留め住くを
涙眼にて花に問へど 花は語らず
亂紅 飛び行きて 秋千にふる

晩春の景。春の風雨に花びらが、鞦韆へと散っていく。寒食節は風雨が激しいとして、この日には火を断って煮たきしなない物を食べた。まさにこの時期である。風雨のため、女の子たちは鞦韆遊びもできない。春が過ぎゆく情景を描いている。

●陸游「山南行」

我行山南已三日
如繩大路東西出
平川沃野望不盡
麥隴青青桑鬱鬱
地近函秦氣俗豪
鞦韆蹴鞠分朋曹

我山南を行くこと已に三日
繩の如き大路 東西に出づ
平川 沃野 望めど盡さず
麥隴青青として 桑鬱鬱たり
地は函秦に近くして 氣は俗豪
鞦韆 蹴鞠 朋曹を分かつ

首偕連雲馬蹄健
楊柳夾道車聲高

首偕 雲に連りて 馬蹄健やかに
楊柳 道を夾んで 車聲高し

(以下省略)

「山南」とは秦嶺山脈の南という意味で、南鄭の位置する漢中最奥地帯を指す。「行」とは「詞」の一種で、節をつけて歌うことを目的としたものである。作者はちよūd、寒食節から清明節にかけて南鄭に行き、子どもたちが楽しくのびのびと遊んでいる様子を目にしたのだろう。「鞦韆蹴鞠分朋曹」は、子どもたちが、鞦韆遊び（おとなしい子の遊び、女子の遊び）とボール蹴り遊び（活気のある子の遊び、男子らしい遊び）とに分かれて遊んでいる様子を描いたものである。

●王禹偁「寒食」

今年寒食在商山
山裡風光亦可憐
稚子就花拈蛺蝶
人家依樹繫鞦韆
郊原曉綠初經雨
巷陌春陰乍禁煙
副使官閒莫惆悵
酒錢猶有撰碑錢

今年寒食 商山に在り
山裡の風光 亦憐れむべし
稚子花に就き 蛺蝶を拈る
人家樹に依り 鞦韆を繫ぐ
郊原の曉綠 初めて雨を経たり
巷陌の春陰 乍ち煙を禁ず
副使官閒にして 惆悵莫し
酒錢猶ほ有り 碑を撰びたりし錢

王禹偁は宋の太宗の時、罪を得て商州（今の陝西省商州）に左遷されていた。首偕は左遷された自分の心情を述べる。さらに山里の風光もまた人を悲しませる。寒食節の期間、人々は休暇をとり、墓掃除をしたり野外の遊びをしたりする。この詩では、樹に縄をかけて「鞦韆」を作り、遊んでいた様子が伺われる。昔は寒食節を「禁煙節」と呼び、家々では火を使うことを禁止していたので、「巷陌春陰乍禁煙」と述べているのである。

●王禹偁「清明感事」

日転秋千影漸斜
忍聞弦管在隣家

日は秋千に転じ 影は漸く斜めなり
忍び聞く弦管の 隣家に在るを

児童不慣貧滋味 児童慣れず 貧しき滋味に
剛拾榆錢索買花 剛く榆錢を拾い 索めて花を買ふ

この詩は、清明節の折の子どもたちの様子を詠む。夕日が照らす鞦韆に焦点が当てられている。隣の家からは管弦の曲が流れてくる。

●梅堯臣「梨花」

處處梨花發 處處に 梨花發き
看看燕子歸 看看 燕子歸る
園思前法部 園思 前法の部
淚濕舊宮妃 淚濕 舊宮の妃
月白鞦韆地 月白くして 鞦韆の地
風吹蛺蝶衣 風は蛺蝶の衣を吹く
強傾寒食酒 強いて傾く 寒食の酒
漸老覺歡微 漸く老ひて 歡びの微なきを覺ゆ

この詩は寒食の夜、喜びも少ないと老いを感じながら、酒を傾けている作者の姿を詠んでいる。鞦韆がかかった夜の庭を月が皎皎と照らしている。

●楊萬里「上巳」

正是春光最盛時 正に是れ春光 最盛の時
桃花枝映李花枝 桃花の枝映ず 李花の枝
鞦韆日暮人歸盡 鞦韆日暮れ 人歸り盡くす
只有春風弄彩旗 只だ春風有り 彩旗を弄ぶ

「上巳」とは、旧暦の三月三日。桃の花が咲く季節であることから、桃の節句。春の陽気の中で、昼間楽しく遊んだ子どもたちは、皆家に帰ってしまい、鞦韆だけが、ひっそりと残されている様子が描かれている。

「鞦韆（フランク）」についての考察

〔鞦韆〕の描かれ方のまとめ

宋				五代			晚唐				中唐	盛唐	唐	時代		
楊萬里 1127~1206	梅堯臣 1002~1060	王禹偁 954~1001	陸游 1125~1210	歐陽脩 1007~1072	蘇軾 1036~1101	李煜 937~978	王建 847~918	韓偓 844~923	韋莊 836~910	李商隱 813~856	白居易 772~846	王維 699~759	杜甫 712~770	作者		
上巳	梨花	清明感事 寒食	山南行	蝶恋花(詞)	寒食夜 春夜	蝶恋花(詞)	鞦韆詞(詞)	夜深	清平樂 (詞)	浣溪沙	無題	寒食夜 寒食城東 寒食	清明二首	作品名		
春花 桃花 李花	寒食	清明 春寒食	楊柳	三月 春	寒食 春	清明過ぎ た頃	杏梅 小花	春	傷春	梨花	春	寒食 清明上巳	清明	季節		
夕暮	月夜	昼夕	昼	夕方	月夜 夜・月	月夜	夜更け	夕暮	夕暮	月夜	昼	夜	昼	時間		
		子ども	子ども			女の 子の 笑い 声、 話し 声		遊女	郊外 の人々	女性	十五才 の 少女	一家の 子ども 達	少年少女 たち	登場人物		
		遊び	遊び	庭	庭	庭	遊び	含羞	遊び	庭	涙 思い 涙	遊び	郊外	役割場所		
人々が帰った後、春風の中で揺れている鞦韆。	月に照らされた鞦韆。	夕日に照らされた鞦韆。	山里での遊び。 木に吊した鞦韆。	山南の子どもが遊んでいる様子。	庭に残された鞦韆。	庭に残された鞦韆。	鞦韆遊びそのもの。	夜になって霧雨の中はぼつんと残る鞦韆。	鞦韆に乗りながら月の出を待つ。	乱世の今でも昔と同じように遊んでいる光景。	思う人が来てくれない寂しさ。	春風に吹かれながら、鞦韆のもので涙。	大喪中にもかかわらず、鞦韆に夢中の子どもたち。	郊外に出かけた時の様子。清明節と一緒に来た上巳節。	鞦韆の遊びはどこに行っても変わらない。	内容

三、「鞦韆」についての考察

(1)春の景物「鞦韆」

唐から宋にかけて「鞦韆」が詠まれた作品を見ていくと、「鞦韆」は「寒食節」から「清明節」の時期にかけての春の、女の子の遊びであることがわかる。つまり、鞦韆が詠まれる季節は「春」である。題名や作品の中に「寒食」や「清明節」という語、或いはちょうどこの時期だとわかるような語（春・梨花・杏花・楊柳・小梅など）が必ず詠まれている。また、唐詩の中には野外での遊びについての多くの記述が見られ、中でも鞦韆をこぐことは、寒食節や清明節の女の子の遊びであり、春の景物として描かれている。同時にこの時期は天候が変わりやすく、時折激しい風雨に見舞われることもあった。火を断つて煮炊きしない物を食べたというのも、激しい風によって起こる火災を防止するためである。雨に濡れる鞦韆を含め、鞦韆はこうした「春」の景物として詠まれている。

また、「鞦韆」は女の子の遊びと述べたが、女の子と言っても小さな子どもよりも、年頃になった女の子の遊びである。主に男の子は「蹴鞠」などで遊び、鞦韆ではほとんど遊んでいない。（ただし、白居易の『寒食夜』には「癡男駭女鞦韆を喚ぶ」とある。）鞦韆は女の子が唯一、外で思いつきり身体を動かして楽しむことができる遊びであった。逆から言えば、ちょうど暖かくなってきたこの良い季節にしかできない遊びでもあった。

原勝郎氏は『鞦韆考』の中で「鞦韆」は寒食に限りたるもの。漸く長閑になつた暑つからず寒からぬ春の日は、閨中の少女をして薄着で以て屋外の遊をなさしむるに最も適するのみならず、四圍の景物も亦大に、此活潑にして而かも派手やかな運動に相應するからであらう。…身軽になる爲めにうす物を着ることは云ふ迄もないが、其外に腰に巾を巻いて兩側に垂れる。」と王建の「盤巾結帶分兩邊」を取り上げて、遊ぶ際の服装を説明している。鞦韆は春になり、女の子たちだけで、開放的な気分を楽しめる唯一の遊びであったと考えられる。

(2)郊外の「鞦韆」と、邸宅の庭の「鞦韆」

今回取り上げた作品から、鞦韆は日中だけでなく夜も行われていたことがわかる。白居易の「寒食夜」はまさに夜、子ども達が鞦韆で遊んでいる様子を詠んだものである。また、この他、韋莊・韓偓・蘇軾・梅堯臣・李煜も夜の鞦韆を詠ん

でいる。このように見てくると鞦韆には、郊外（野外）で行なわれたものと、宮中や邸宅の庭で行なわれたものの二種類があると考えられる。夜に鞦韆の遊びができるのは、郊外とは考えにくく、宮中や邸宅の庭であろう。確かに、漢の武帝の話や、唐の玄宗が鞦韆を「半仙戯」と名付けたという話から、宮中でも女性が鞦韆に乗っていたと考えることは容易である。宮中や邸宅の庭の鞦韆は、夜に月とともに詠まれる。春の夜のまだ肌寒い明るい夜に白く咲いている「梨花」を配置したりすることによって、いつそ夜の暗さを鮮明にしている。一方、郊外に設置された鞦韆は、庶民の遊びで、清明節の際、郊外に出かけた際に詠まれている。原氏は「季節が季節であるから夜の屋外遊戯の出来ぬこともないが、夜は夜でまた別の趣があるとなつて居つたらしく、寒食と云ふので火を焚かず月の光りでやつたらしく」と述べている。鞦韆の種類は原氏によると「唐の鞦韆の様式には樹枝を利用するものと特に柱をたてるものとの二種あつたらしく、其うちで樹枝を利用してそれに繩をかけ架をつるす方は、本来のやり方であらう。」と述べている。恐らく、邸宅で行なわれたものは、柱をたてるものであつたと考えられる。また、「鞦韆は初め、一本の繩で両手で繩をつかんでこいでいたが、次第に二本の繩に板を置いてこぐ形に変わつていった」という説もあるが、これは根拠がはっきりしない。しかし、鞦韆が今日のような形であつたかどうかは、甚だ疑問である。また、鞦韆の様式については、宋の楊萬里の『上巳』に「只だ東風有り彩旗を弄ぶ」とあり、柱頭に彩旗を掲げていた鞦韆が詠まれている。また、王建の『鞦韆詞』には「終に鳴璫を賭け 斗にはがに自ら起つ」という句があるが、音を鳴らすために「鳴璫」を帯びる者もいたようである。また、乗り方について、王建の『鞦韆詞』には、「旁人上に送り 那ぞ貴きに足らん」とあり、坐つて人に推させている記述もある。

四、時代による「鞦韆」の詠まれ方の変遷（唐代から宋代にかけて）

鞦韆の詠まれ方についてみると、唐代は遊びとしての鞦韆を詠むのが中心であった。盛唐の杜甫や王維、中唐の白居易、晩唐の韋莊の詠んだものは、民間で流行した春の遊びである。これらの詩を読むと当時の人々の風俗習慣が理解できる。また、晩唐の王建は鞦韆そのものを詠み、そこから鞦韆をどのように楽しんでいたかを理解することができる。

しかし、晩唐あたりから、鞦韆を遊びとしてではなく、「寂しさ」「憂い」「含羞」などと結びつけて詠むようになった。晩唐の李商隱は成長していく十五歳の少女が、春風に吹かれながら、鞦韆のもとで涙している姿を描いた。また、韋莊は思ふ人が現れない寂しさに涙する女性を詠んだり、鞦韆に乗りながら月の出を待つ遊女の恥じらいを詠んでいる。韓偓は夜になつて霧雨の中にぼつんと残る鞦韆を詠んでいる。晩唐あたりからすでに、鞦韆と憂いを結びつける詩が詠まれるようになってきている。また、五代では、李煜が鞦韆のところにいる女の子の笑い声や話し声に、興味をそそられる心情を詠んだ。

さらに宋代になると、蘇軾は夜の庭に残された鞦韆を、女の子たちが昼間楽しく遊んだ情景を想像させる景物として使うようになった。残された鞦韆には若い女の子たちの健康そうな声や華やかな様子の名残があり、周囲の静けさをよりいっそう強調する景物として効果的に詠まれている。

一方、夜ではなく昼間の鞦韆が、感傷的なイメージを出している詩もある。春の風雨の中の鞦韆や、夕暮れにぼつんと取り残された鞦韆である。歐陽脩は風雨の中で花びらが散る中の鞦韆を描き、また、王禹偁は日が暮れて、鞦韆に夕陽が射す景を描き、また、楊萬里は人々が帰ってしまった、ぼつんと残された鞦韆を描いている。夜の景ではないが、それぞれが、昼間の少女達の楽しい遊び声が聞こえてきそうな、女の子たちの様子を想像させるものとして登場し、感傷的な気分をいっそう高める効果を出している。また一方で、陸游の「山南行」や王禹偁の「寒食」のように鞦韆を遊びそのものとして描く詩も依然として多く詠まれている。

『鞦韆考』で原氏は「時代を異にすると同じく鞦韆を詠じても、其行き方の異なる…これ亦頗る面白いことだ。唐代の鞦韆の詩は、…遊戯を動的に材料として採用して居るけれど、之に反し宋代の詩人が鞦韆を詠ずると、遊戯其物よりは、其運動機械及び之によりて象徴される感傷を歌ふをつねとする。…いづれも生々と動く気分よりも、寧ろ誠に繊細な技巧の發露に止まつて居る。」と述べている。原氏は大まかに唐宋と区別しているが、鞦韆に結びつけて感傷を詠むという傾向はすでに晩唐から現れている。鞦韆は唐から宋にかけてただ単に遊びとしてではなく、「ぼつんととり残された鞦韆」に女の子たちの楽しい遊びの情景を重ね、憂いや感傷と結びつけて詠まれるようになったと言えよう。

五、「鞦韆」と女性のエロティシズム

鞦韆を調べていると、鞦韆遊びは性を感じさせるものだと述べたものはいくつか出会った。例えば講談社『日本大歳時記』には、鞦韆について「古来中国では鞦韆と言つて寒食の節の宮嬪たちの戯れとした。盛装の宮女たちが裾をひるがえして戯れるところに、艶なるエロティシズムがただよい、漢詩には春の景物として詠まれている。」とあった。また、『鞦韆』は今こそブランコの意味を持つが、古くは中国で宮女が使つた遊び道具（性具）をさす。いまのブランコとは少し違い飾りがたくさんついており、遊戯中、裾から足が見えて、皇帝が見て運よく夜伽に呼ばれる可能性から艶かしいイメージを持たれていた。北宋の文人、蘇軾の漢詩「春夜」にも鞦韆が出てくることから、性行為の過程を詠んだという解釈もある。（ウィキペディア）という説もあった。確かにブランコに乗ると、裾が乱れ、素足が見える。素足を性的なものの一つと考えると、「ブランコ」は格好の遊具である。唐代には纏足があり、女性の白くて小さい脚は、エロティシズムを起こさせたのではないだろうか。その点からも鞦韆が「エロティシズム」と結びついていると考えることはできる。今回調べた李商隱の「無題」、韋莊の「浣溪沙」や「清平楽」、韓偓の「夜深」など男性が女性に成り代わつて詠んだ詩には、女性の色っぽさを感じられる。特に韋莊の「浣溪沙」や「清平楽」に登場する男を待つ女や遊女は色っぽく描かれている。

恐らく、唐代の初め頃は、女の子の遊びとしての鞦韆が描かれていたが、次第に鞦韆と年頃の女性が結びつくことによって、感傷的な気分を付け加える効果が出てきたのであろう。それと同時に男性が女性に成り代わつて詩を詠む際、鞦韆は遊女や男を待つ女性の憂いを詠むための素材として用いられるようになっていった。しかしながら、鞦韆と女性の素足と結びつけることは、今回は資料不足のため、今後の課題にしたいと考える。

六、韓国・日本における「鞦韆」

蛇足ではあるが、韓国と日本の「ブランコ」についての情報だけを挙げておく。詳しい検証は今後の課題としたい。まず、韓国についてであるが、韓国にも「クネ」という中国に似た習俗があったようである。『日本国語大辞典』には次のような記述がある。

「インドでは紀元前二〇〇〇年ころ、冬至の日の農耕儀礼として女子が乗る儀式が行なわれていた。インドから中国へは六朝時代までには伝わり、「鞦韆」と呼ばれて、唐代には、冬至から数えて一〇五日後の寒食の日に女子が乗るのが宮中の儀式であった。…(中略)。韓国にもクネという似た習俗があるが、こちらは端午の節供の日に女子の成年儀礼として行なわれた。いずれも女性が行くというの、もとは農耕儀礼であったことを裏付ける。」

さらに次のようなものがあった。

「韓国では、旧曆四月八日(釈迦誕辰日)から五月五日(端午の節句)まで、春の行事としてクネトウイギ(長ブランコ乗り)が行われてきました。春の祭りとして男性はシルム(韓国相撲)で強さを競い、女性は特設の長いブランコ(クネ)でどれだけ高く上がれるかを競います。村の入り口や広場の木にぶら下げたり、足場を組んで作った長いブランコをどこまで高く漕げるか。女性が外に出て運動をする機会が少なかった韓国社会では、春の空気を思い切り吸って、身体を解放できる行事だったことでしょう。」(春庭カフェらパンセンバージュ「春庭ことばの海漂流記」)

また、日本の「ブランコ」については、小学館『日本大百科全書』の「ぶらんこ」の項には、「古くはゆさはり、ゆさぶり、のちにぶらんことも呼ばれた。…(略)中国では春の季節、寒食に長い縄を高い木にかけ、横木の両端をその二本の縄で釣り、女子がこれに座して揺り動かして遊ぶ行事があり、唐時代には玄宗皇帝が羽化登仙(人間に羽が生えて仙人となり天に登ること)の感を味わう、という意味から半仙戯の名を与えた。朝鮮ではクネといわれ、端午の日に女子の成年儀礼として行われる。日本にも渡来し、平安初期に宮中でも盛んに行われた。承平年間の源順の著、『倭名類聚鈔』には『和名由佐波利、綏繩を以つて空中に懸け、以つて為す戯なり』とあり、嵯峨天皇の鞦韆の詩にも、当時の貴族階級間での流行ぶりが示されている」とある。また、原氏の『鞦韆考』によると、その後、ブランコは廃絶に至り、『袖中抄』(平安末期の歌学書)を最後に文献に登場しなくなつた。しかし、「ブランコ」は江戸時代に「ふららこ」として復活し、俳句にも詠まれるようになったと述べている。さらに日本のブランコは中国から入つて来た古いものと、西欧から入つて来た新しいものの二つの流れがあると指摘している。

終わりに

最後にこれまでの「鞦韆」のイメージを踏まえ、蘇軾の「春夜」を、もう一度鑑賞してみる。華やかな宴會が終わり、人々が寝静まった頃、花の清らかな香りが漂う中で、月明かりに皎皎と照らされ、庭の片隅にぽつんと残された「鞦韆」。「鞦韆」は、寒食節から清明節にかけての時期に登場する年頃の女の子たちの遊具であった。恐らく邸宅の庭に柱を立てて作られ、華やかに飾られたものである。ある程度の階級の品のある女の子たちが、昼間、一年にこの時期だけの「鞦韆」にのり、開放感に浸り、にぎやかに声を張り上げて楽しく遊んでいたに違いない。「鞦韆」は、昼間の女の子たちのにぎやかな遊びの光景を連想させる景物であり、女の子たちの残像が今も残っているかのようである。『俳句大歳時記 春』のブランコの項には「後宮の美女たちが裳裾を翻してはなやかな動きを示す鞦韆が夜ふけてたれて動かない。そこに詩境を見いだした句で、去り行く春への感傷がにじんでいる」とある。まさにブランコの「動」から「静」への変化が、春の終わりを感ぜさせる。また、春と言ってもひんやりとした感じの庭には、春の花々が咲いている。夜の静けさの中でも臭覚だけで、花の存在を知ることができる。それによって、昼間の美しい景を連想することもできるのである。そこには、夜の感傷的な雰囲気醸し出されている。さらに、第一・二句目の「春宵一刻」や「花」「月」は、年頃の女の子たちの若さゆえの美しさに通じているようにも感じられる。そして第三句では、楼台で練り広げられていた宴會に侍っている華やかな女性の姿も連想される。「鞦韆」が年頃の女の子たちのこの時期に限った遊びであり、感傷と結びつくものだと理解することによって、この詩の解釈の幅が広がり、新たな世界をイメージできた。以上のように、異なる国の、異なった時代の言葉は、現代の自分たちの感覚では、理解しづらいものが多い。漢詩に限らず、外国語や外国文学でも同じである。その中で、言葉が持つイメージを的確につかむことは、作品の理解を深める上でとても重要であった。今回の研究を今後の授業に活かしていくとともに、ブランコとエロティシズムとの関係や、韓国と日本のブランコについてもさらに研究していきたいと考える。

注1 『天寶遺事』には《古今藝術圖》を引いて「鞞韞為春秋時北方的山戎族所創、用來練習身手。後來、齊桓公北伐山戎族、遂把鞞韞傳入中原。另外、有說盪鞞韞是為了紀念嘉慶年間玄天大帝為人民驅除旱災及瘟疫的神蹟。」（現代中国語訳）とある。また、『俳句代歳時記 春』（角川書店）には「鞞韞はもと中国北方の蛮族の間に行なわれていたのだが、紀元前七世紀に齊の桓公が北伐を行なったのを機会に中国に輸入されたものといわれ、蛮族の間では寒食になると鞞韞にのって遊ぶ風俗があったという。（『事物起源』）とある。

注2 『天寶遺事』に「鞞韞也作秋千、最早稱為千秋。至漢武帝時、宮中以千秋為祝壽詞、取其千秋萬壽之意。及後為避諱將千秋兩字倒轉為秋千。」とある。

注3 『天寶遺事』に「宮中至寒食節競豎鞞韞、令宮嬪輩戲笑以為宴樂。帝呼為半仙之戲。」とある。

注4 詞：唐末に起り、五代から宋にかけて大流行した、新しい韻文の形式。詩に比べ、一句の字数が長短不定、押韻のしかたも異なり、俗語を多用し、楽曲の名をその詞の題名とするなどの特色を持つ。

【参考文献】

- ・原勝郎『鞞韞考』青空文庫
- ・中国詩人選集6『王維』都留春雄 岩波書店
- ・中国詩人選集9 10『杜甫』上・下 黒川洋一 岩波書店
- ・中国詩人選集12 13『白居易』上・下 高木正一 岩波書店
- ・中国詩人選集15『李商隱』高橋和巳 岩波書店
- ・中国詩人選集16『李煜』村上哲見 岩波書店
- ・東洋文庫『唐詩三百首』1・2・3 目加田誠 訳注 平凡社
- ・漢詩大系6・7『唐詩選』斎藤响著 集英社
- ・漢詩大系9『杜甫』目加田誠著 集英社
- ・漢詩大系10『王維』小林太市郎・原田憲雄著 集英社
- ・漢詩大系12『白樂天』田中克己著 集英社
- ・漢詩大系17『蘇東坡』近藤光男著 集英社
- ・漢詩大系19『陸游』前野直彬著 集英社

- ・漢詩大系24『歴代名詞選』中田勇次郎著 集英社
- ・『唐詩三百首詳解』上・下 田部井文雄 大修館書店
- ・『研究資料漢文学 詩Ⅱ』堀江忠通・大地武雄 明治書院
- ・『李商隱詩選』河合康三選訳 岩波書店
- ・高橋和巳作品集別巻『詩人の運命』高橋和巳 河出書房新社
- ・『日本大歳時記』水原秋櫻子・加藤楸邨監修 講談社
- ・『宋詩概説』吉川幸次郎 岩波文庫
- ・『日本大百科全書』小学館
- ・『日本国語大辞典』小学館